

今月の

数字

1716年=300年前

(米将軍と呼ばれた徳川吉宗が
8代将軍に就任した年)

松田 恭子

Profile まつだ・きょうこ ●津田塾大学国際関係学科卒業後、日本能率協会総合研究所で10年間公共系の地域計画コンサルタントとして勤務。その後、東京農業大学国際食糧情報学科助手を経て、現在、農業マーケティングアドバイザーとして農産物商品開発や販路開拓などをサポートする。(株)結アソシエイト代表取締役。

今年、徳川吉宗が徳川幕府の8代将軍に就任した享保元年(1716年)から300年になる。吉宗は、江戸の三大改革の一つである享保の改革を実行した江戸幕府中興の祖であり、時代劇で長期にわたってシリーズ化されたテレビ番組で誰もが知っている人物だ。享保の改革とはどのようなものだったのか。

戦乱を最終的に平定した江戸幕府開府から100年以上経ち、従来「半農半武」だった武士はホワイトカラーとして都市で生活するようになった。生産手段を持たない給与生活者という意味では現代のサラリーマンや公務員と似ている。農村では、兵農分離により大規模家族による農業経営が解体し、小規模な家族労働による集約的な稲作中心の農業生産が発展した。

この結果、コメの過剰生産が進み、米価は1681年をピークに18世紀まで低下の一途をたどる。また、享保時代を30年さかのぼる元禄時代は、貨幣切り下げによる市中の貨幣流通量の増加で空前の好景気に沸き、京都・大坂で生産された「ブランド品」が消費地江戸に流通するモノの流れを作り、貨幣経済が浸透したが、コメを売って農具や肥料を購入する農家や、コメを給与としている藩や武士の経済は困窮した。天災続きが追い打ちをかけてバブルは崩壊、財政難のなかで享保時代が始まった。

吉宗は「米将軍」と呼ばれたほど、コメの対策に重点を置いた。利益を幕府と町人で分ける形で民間活力を活用した新田開発を進め、年貢を定率でなく定額とすることで従来に比べ率を上げずに年貢額を増やした。さらなる増産で米価が低下するのを防ぐため、大坂に設置されていた堂島米市場を公認し、市場に介入して流通量を削減することで米価を引き上げる政策に転換した。具体的には、諸大名にコメを買わせる「買米令」、飢饉に備えて

コメを備蓄する「囲米」、江戸や大坂にコメの流入を防ぐ「廻米制限令」等の政策が取られたほか、「酒造制限令」を解禁してコメの消費量を増やそうとした。今日のコメ政策に酷似しているが、米価のコントロールは必ずしもうまくいっておらず、コメ政策については後世評価の分かれるところとなっている。

しかし、コメ以外の経済政策は今日の礎を築いた。享保時代までの間に枯渇した金山・銀山や貿易赤字を改善するために輸入品の国産化を進め、砂糖・薬草栽培や生糸生産の全国的な適地適作を奨励した。たとえば、薬草の場合、33年にわたる薬草検分を行ない、薬草に詳しい医師や薬種問屋が各地に赴いて知識の交流を図った結果、幕府の駒場薬園・小石川薬園・下総小金野薬園のほか、諸藩でも薬園が設置され、和漢薬の基礎を作った。また、本草学者が加賀藩の支援を受けながら40年以上かけて編纂した3,590種の植物、動物、鉱物、薬物に関する博物書を下敷きに、幕府は全国の諸大名・代官に命じて全国の動植物、鉱物等産物を網羅的に報告させ、「諸国産物帳」としてまとめた。

吉宗の取り組みは、従来の稲作中心の農業からの本格的な方針転換を促すものであり、これまで禁じられてきた田での商品作物の栽培を各藩が奨励することができるようになった。国産化された農産物は、金銀の資源輸出から加工品輸出へ構造を転換し、明治維新の際の重要な輸出品となって日本の国力を養った。

強力な特産品は1日にして成らず。40年以上も薬草情報の編纂を支援した加賀藩の懐の深さと、各地での人的交流による知の集積は、イノベーションが情報伝達手段に依存するのではなく、マインドであることを教えてくれる。